

無量寿経における「清浄」に関する考察

朝 日 隆 道

目 次

はじめに(序論)

第一章 〈初期無量寿経〉における「清浄」

第一節 諸經典に示される清浄思想

第二節 往生に関して(主に往生法の考察)

第三節 仏国土について

第二章 〈後期無量寿経〉における「清浄」

第一節 仏国土について

第二節 往生に関して(智慧と聞名)

第三節 『莊嚴経』における「清浄」

むすび(結論)

第一章

〈無量寿経〉の研究は、長い時間・歴史をかけて、種々な視点から様々な論功が成されていることから、浄土仏教の研究分野として関心の高い分野であることを思わせる。本修士論文では、この經典の思想を「清浄」という思想を中心に解釈し一考加えていきたいと考えている。そもそも、「清浄」という思想は、〈無量寿経〉内に突発

的に起こった思想ではなく、初期仏教からの教理の中にも見受けられる。そこには、国土の清浄性というよりも、衆生の身心の清浄を説く場合が多く、後に〈般若経〉を始めとした大乘仏典の中に国土の清浄という思想が見受けられる。

そこで、〈初期無量寿経〉においての「清浄」について考察を行う。文献を検討すると、『大阿弥陀経』において「齋戒清浄」という語句が多く見受けられる。これは、例えば、二十四願中・第七願三輩・上輩などに見られるが、出家者の仏道実践の行の一つとして、この語が用いられている。第七願には、戒の他にも六波羅蜜の行道が説示され、加えて、上輩も同じく六波羅蜜の行道が示される。そこで、先学達の論功から「戒」についての清浄性を検討すると、出家・在家とも「戒を持つ」ことは仏教教理の中で求められている。さらに、『大阿弥陀経』には〈般若経〉の思想の影響はまだ見られないと言われる。事実、六波羅蜜の中の一つ「戒波羅蜜(戸羅波羅蜜)」の内容を見ると、これは「十善道」であるという。実際に『大阿弥陀経』において、「十善道」の内容は見受けられるが、この場合、これは主に在家者を対象に説かれたものであるから、「十善道」が出家者の「齋戒清浄」とはならない。それでは、出家者に求められる、「清浄戒」は具体的にどういった内容であろうか。後の文章の流れから考察すると、阿弥陀仏の菩薩時をヒントに「功を積む、徳を累ねる」といった考えと関係が深い。実際、『大阿弥陀経』は自因自果の往生構造を持ち、行的思考が主である。出家者には当

然、在家者よりも高度な行が求められるが、出家者の「戒」は「功を積む、徳を累ねる」と繋がり深い。

つぎに、仏国土の考察であるが、国土は曇摩迦(留)(魏訳の法蔵)が修めた行により建立されたものであり、これは諸異本にも通じた教理である。そこで「初期無量寿経」においての特徴を考察すると、浄仏国土の菩薩行という思想は簡単にされているか、見受けられないという。そこで、国土の莊嚴相の内容を検討すると、「面目皆端正 浄潔殊好」・「皆紫磨金色三十二相八十種好皆令如仏」とあり、国土内の菩薩・阿羅漢はこれらの姿であると言われる。また、『平等覚経』の重誓偈・往勤偈には、「計本国若如夢 無数劫浄此土」・「国覚衆甚清浄 無数劫難思議」・「聞歡喜喜広奉行 疾得至得浄処」といった、浄仏国土に類似した思想を見ることができ。また、「初期無量寿経」では「光明」の清浄(『大阿弥陀経』のみ)、国土の池・風の清浄という説示もあり、したがって、「果の視点」から考察をすると、「初期無量寿経」の仏国土は清浄性を有する国土であると言える。この果が清浄であるからには、それに携わった行も清浄行と言えるのではないだろうか。

第二章

つぎに、「後期無量寿経」(特に「無量寿経」と「如来会」)の清浄についての考察を行う。先に考察した「初期無量寿経」の浄仏国土の菩薩行という思想が「後期無量寿経」では顕著に見受けられる。

無量寿経における「清浄」に関する考察

例えば、既に論功が成されている「諸仏如来浄土之行」は「諸仏如来が土を浄める行」であるとされ、この諸仏の浄仏国土を手本として阿弥陀仏の仏土が清浄化されたことが経典の流れの中から読みとれる。清浄行に関しては他にも記述が見られ、「後期無量寿経」においては、「清浄莊嚴」という内容でもあることが書かれている。また、「後期無量寿経」においては、四十八願文中、第三十一願・三十二願に「国土清浄」の内容を示す願文がある。これは、「初期無量寿経」には見られなかった内容であるが、特に三十二願においては、有相的な浄土が詳しく示され、その莊嚴相は諸々の人天を超越していることが示されている。また、これらの莊嚴相は仏の修めた功徳を媒介として示されていることから、阿弥陀仏の果徳としての浄土ということが分かる。

阿弥陀仏が仏土を建立したのは、「生死の苦を抜く」ことが目的であった。また、六波羅蜜の行がその主体となるのであるが、六波羅蜜の行から、諸善根を積み、それにより衆生が教化されるという内容が一致している。さらに、莊嚴の内容から検討すると、「方便」についての思想が見受けられる。有相的な表現は方便の営みという理解に繋がる。仏国土については「無」の語から、無形的な表現も用いられることがあり、無から有の表現が方便の営みと理解される。つづいて「後期無量寿経」の往生について、本論では、「智慧と聞名」を焦点に論を進める。例えば、「無量寿経」の重誓偈・東方偈には「浄慧」という「淨い智慧」の概念があり、さらに「如来

会」の対応箇所には「功德智慧景 能破諸幽冥」とあり、智慧の働きが迷いを破るという思想を有する。〈後期無量寿経〉において、「智慧」についての用例から見ると、「智慧」は、衆生を往生させる仏の智慧であり、さらに、煩惱の患を滅するものである。『無量寿経』では「無量寿国声聞菩薩。功德智慧不可称説。又其国土。微妙安樂清浄若比」とあり、浄仏国土の形成において、「智慧」の持つ役割は明らかにされている。

では、つぎに「清浄と衆生の往生」の視点について、今度は「聞名」について一考する。すると、「聞名により、清浄信(心)を得る」という内容が確認され、これは『如来会』に強く見られる。『如来会』では、この清浄信(心)の内容を「以清浄心向無量寿如来(中略)心無疑惑乃至獲得一念淨心」とあり、「疑惑の無い」ことを清浄信(心)、淨心であると規定する。

つまり、(後期無量寿経)の衆生の往生という点において、「智慧と聞名」の視点から考察を試みたが、「智慧」は法蔵の修めた六波羅蜜により達成された「淨慧」であること、そしてその目的は「生死の苦を抜く」ことであった。さらに、「聞名」に視点を移すと、「聞名から清浄信(心)」の思想が『如来会』に強いことが分かった。そしてその性格は「無疑心」であり、それが、衆生の願生に強く関わることも明かされている。

最後に『莊嚴経』においての清浄についてを検討する。『莊嚴経』においては、經典内の思想に諸異本とは異なる特徴があり、先学達

も大変注目を寄せている。『莊嚴経』の仏国土についての記述を見ると、例えば、『無量寿経』に比べ、「刹」の文字を用いた表現が見受けられ、これも特徴の一つとしてよいであろう。またその国土は既に指摘されたように「方便と莊嚴」の関係が見受けられる。「方便を修することが、仏刹を莊嚴することにつながる」という。また、仏国土の表現には「無」の表現があり、これを「大乘空觀の影響」と解説する論もある。さらに、願文にも独自の願文があるが、特に「清浄」について記載された願文を見ると、第二十八願に「聞我名号修持淨戒」とあり、第三十一願には「聞我名号永離熱惱心得清涼」とあり、「離熱惱心」から考えて、「清涼」とは、「信」か国土の内容と考えられる。これは双方聞名が機縁となつて起こるので、聞名思想の注目点もある。

むすびにかえて

〈無量寿経〉の清浄について考察をしたが、少なからず、国土の清浄と衆生の清浄との二種を確認することができた。經典において、この清浄を裏づけるのは、「六波羅蜜」の行の思想が強い。そこで、大乘仏典において、清浄の裏づけが他にどのような因行があるのか、今後の注目点である。